

## あ と が き

今は2月、ソチオリンピックが多くの感動を残して終了した。20年越しの夢を叶えるもの、4年越しの夢を叶えられないもの、いろんなドラマを垣間見ることができた。冬のオリンピックといえば雪である。雪は水が氷の結晶になったものである。水蒸気が非常に気温の低いところで凝縮する場合、水の状態を飛び越して雪になるのである。水蒸気が凝縮して雪になるには芯が必要で、空気中のイオンや、細塵がこの芯になるのである。上層で氷晶が出来て、これが大気中を落ちてくる間に、水蒸気が昇華によって、その周りへだんだん凝縮して附加してゆくと、雪の結晶になるのである。地表に近くなって、気温が零度に近いところがあると、結晶は互いに衝突しながら落ちてくる間にお互いに付着しあって、地上へ達するときには数百の結晶が1つの固まりになり、降るのである。ときには15cmにもなるこの雪を牡丹雪と呼び、降り積もって雪害をおこすのはこの雪である。ちなみに粉雪は、牡丹雪に対してサラサラした雪のことをさす。2月は全国的にたびたび大雪にみまわれ、大分でも数時間の交通渋滞、列車の脱線事故があったのは記憶に新しい。私の2月の東京出張も1回目は飛行機が全便欠航で中止、2回目はJRで東京駅にたどり着いたが、みどりの窓口には運行停止になった上越、長野新幹線の客が長い列を作って対応を待っていた。八重洲口を出るとまだ歩道、車道にたくさんの雪が残っており、思わず「雪国か！」と叫んでしまった。

冬のオリンピックの競技といえばいろいろあるが私が注目しているのはジャンプである。1972年札幌オリンピック70メートル級ジャンプ（現在のノーマルヒル）で日の丸飛行隊が金銀銅を独占したのは、その後記録映画化され小学校で見ることもあったためか鮮明な記憶として残っており、長野オリンピック団体、そして今回のオリンピック団体でもエース葛西を中心に4人のチームが体調が万全でない中、それぞれがきちんと役目を果たし、見事銅メダルに輝いた。私たちの医師会活動もこうありたいと思うシーンであった。

雪は天からの手紙である。今回の全国各地の数回の大雪はどのようなメッセージを私たちに送っているのであろうか。

（編集委員：澤口 博人）

## あ と が き

暮れの名物アメ横の新巻鮭のテレビ中継を見ながら考えた。ベニザケとヒメマスはもともと同種同個体であったことを皆様は御存知でしょうか。

サケは回帰性のある魚類で川に生まれ海に下り生殖のため母川回帰をして産卵すると言われてきた。ところが発生的には湖川に棲むヒメマスがその起源で生誕地である湖川に個体数が餌の量を上回ると生存競争がおこり、追われたヒメマスの幼魚は銀化(ぎんけ)して降海を開始する。銀化した個体をスマルトと言ひ、体色が白くなり海水環境に適応するための器官が発達する。この変態には甲状腺ホルモン、成長ホルモン、副腎皮質ホルモンが関与すると言われている。湖川に残留した生存競争に勝利したヒメマスは一生をその形態のまま過ごして残留型とされる。一方降海したヒメマス(銀化、スマルト化)は大海を3~6年回遊し大量の動物性プランクトンや甲殻類を食することで大きく成長し、一見別種の魚かと考えられるベニザケとなる。ちなみに、その身の鮮やかな赤色は甲殻類を多食することによるアスタキサンチンの色とされている。ベニザケは回帰性があり生まれた湖川に遡上し産卵して一生を終える。もちろん降海型である以上、その生存率はかなり低く多くは過酷な環境の中で命尽きるのであるが、最初に敗者であったものが大きく成長するこの話を、けんかで負けて泣いている子供や受験に失敗した学生に慰めの話、いや勇気づける話としてあたためていたが、先日娘にこの話をすると「私は安寧な生活をして姿もかわいいヒメマスの方が良い」と!!だから人間はやめられない。この価値観の多様性はあいだみつをや金子みすずの感性だ。「みんなちがって、みんないい」の世界だ。生命の営みの朽みさと神秘性、人間の価値観の多様性の両方に万歳だ。今年もまた生命の小さな息吹きを感じる春がそこまでやってきている。

(編集委員：後藤 正幸)



あ  
と  
が  
き

昨年9月号の本会報のあとがきで、「認知症男性、線路に入り死亡 電車遅れて遺族に損賠命令」という記事を紹介した。

その後、週刊誌やTVでも大きく取り上げられた。遺族が名古屋高裁に控訴し、司法の場で家族の責任について改めて判断することになったが、その経過を十分見守りたいと思っている。無情な判決を出した名古屋地裁での裁判の内容がさらに報道されているが、驚くべき内容が明らかにされている。

ひとつは、介護に深くかかわるほど重い責任を問われていることだ。長男は、親の介護のために妻を実家近くに住ませ、自分も月に3回ほど実家を訪れていた。その長男と85歳の同居していた配偶者だけに責任を認め、介護とのかかわりが少なかった他の兄弟の責任は問わなかった。これでは、積極的に親の面倒を看ようとする親孝行な子供がいなくなるのではないか。2つ目は、認知症の人を見守る注意義務を家族に厳しく求めている点だ。認知症の人は周りがどんなに注意していても、勝手に出て行ってしまふことがあり、もし徘徊させるなどいうなら、部屋に鍵をかけて閉じ込めざるをえず、それでは本人の思いに寄り添った介護ができなくなるだけでなく、認知症を悪化させることになる。閉じ込めるなどということは、認知症の研修会でも講師が最も強調する点だ。家族だけに任すことができないのが認知症であり、社会全体で認知症の人を見守る必要がある。こういった事故を起こさないようにする責任は、本人や家族ではなく、社会全体にあると考えを変えねばならない。この事故の場合は、JR東海が線路に入れないように柵を設ける義務があるとすべきだ。また、徘徊する認知症の人を見守る体制は各地域で徐々に整えられつつあるが、まだまだ地域差があることも事実だ。

それでは、今の日本でどのくらいの徘徊者が出ているのであろうか、また徘徊の結果どうなったのであろうか。調べてみてびっくりした。警察庁の全国調査が見つかったが、平成16年の調査が最新であった。

同庁によると、「昨年1月から12月末までの1年間に、全国の警察署に寄せられた徘徊高齢者に関する捜索願や110番通報は、2万3,668件。このうち、死亡が確認されたのは548人、行方不明のままは357人に上った。一方、無事に発見されたのは1万7,842人、本人が自分で帰宅したのは4,921人だった。死亡原因は、側溝に落ちたり、冬場は凍死したりするケースが多いと見られる。」

10年前の統計であり、認知症の人がかなり増加した現在、地域で行われている対策の効果を確認するためにも、これらの数字がどう推移しているのか、地域別にぜひ知りたいものである。

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

今では絶滅危惧の状態だが、少し前まで家庭に一つは火鉢があった。火鉢はそもそも暖房器具だが、常時お湯を沸かしたり、餅やスルメを焼くのに便利な調理器具でもあった。

火鉢に置いた金網の上で焼く物で印象に残っているのは酒粕である。祖母が板状の酒粕を焙るとそれはもう実に良い香りがするのだ。焙り酒粕の食べ方には色々あるようだが、祖母は砂糖をつけて食べていたように記憶している。ただ当時小学生だった私は良い香りはするものの味はあまり好きではなかった。実は酒粕にもブランドがあるようで、有名な酒造メーカーの酒粕は人気なのだそうだ。あるテレビ番組で、色々な有名ブランドの酒粕で作った甘酒を酒好きの出演者が品評するという企画があったが、やはり美味しい酒には美味しい酒粕という結論であった。

ところで以前は甘酒というのは酒粕と砂糖を湯に溶いて作るものだと思っていたが、実は米と麴から作られるものが「本家？」であると最近知った。「甘粥」とも呼ばれるこれは柔らかめの粥に米麴を入れ発酵させることでデンプンを糖化させて作る。こちらの甘酒はアルコール分がなく、純粋に米から作られた糖分なので特にクセもない。これにすりショウガを入れると旨さが引き立つので私の好物のひとつだ。今は甘酒用の米麴が販売されているので、少々コツが必要だが家庭でも保温機能のある炊飯器で手軽に作る事が出来るのでありがたい。

一步間違えば一酸化炭素中毒の危険がある火鉢は依然として絶滅寸前だが、酒粕、甘酒は最近の自然食ブームで人気が復活し始めているようだ。やはり日本古来の食文化は絶滅などしないと信じたい。

(編集委員長：吉賀 攝)

あ  
と  
が  
き

昭和54年1月文部科学省(当時の文部省)が受験戦争を緩和するという看板をかかげて開始したのが共通一次試験であった。私は昭和55年1月、56年1月と2回受験したが、それまでの一期校、二期校の受験データが通用しなくなったため、高校、予備校の受験校の指導も混乱を極め、その中で私たちも戸惑いながら大学受験に望んでいた。それから30年たち共通一次試験はセンター試験に名前を変え、私立大学も参入し、大学受験の一つの流れはできあがっていた。ところが大学入試改革なのだそうである。

センター試験が1点刻みの一発勝負であるということ、受験する大学によりセンター試験の受験科目を選択でき、受験しない科目を勉強しないため高校生の学力が低下すること、大学側から学力の低い高校生の学力の底上げをしてほしいとの要望が高校側にあったことが大学入試改革に取り組む理由のようである。

10月に大学入試改革を議論している政府の教育再生実行会議が示した案は、高校在学中に複数回受験をさせて、その成績を1点刻みではなく、大卒のブロックで評価し、現在のセンター試験の代わりにして、二次試験は面接や論文を重視させるのだそうである。昭和54年以前の制度に戻すという選択は検討されたが排除されたようである。

全国の大学の二次試験が面接、小論文のみで合否判定するのは現実的ではないのでやはり学科試験は行うであろうし、なんのことはない高校3年の1月からの入試が、かなり早くなりそれが複数回になるだけなのではないのだろうか。スポーツ部活動など文武両道はますます難しくなるであろうし、高校入学時からの私立大学志望者も増えるであろう。浪人生の受験というのは今後の検討課題のようである。高校在学中の入試となれば高校は横並びで予備校化するであろうし、そのような学校で豊かな感性をもった人の育成などができるのだろうか。おりしも今秋にも議員立法した「いじめ防止対策推進法」が施行されるこの時期にである。

日本の子どもの学力低下はゆとり教育への方向転換から始まっているといわれており、小中学校からの底上げが必要なのに先に高校から着手するのは正しい判断なのだろうか。政府は5年後の導入を目標にしているようであるが安倍総理大臣をはじめ、共通一次試験以前に大学受験をされた方たちが主導して議論をすすめているようですので、各年代層を代表する多くの識者から意見を取り入れて時間をかけて慎重に結論を出していただきたいと願っています。

(編集委員：澤口 博人)

## あ と が き

平成25年9月19日仲秋の名月を欠けることのない見事な球体としてながめながら この稿を起こしている。やっとな涼しくなってきた今年の秋 天空に黄金色の月が光っている。仲秋の名月を満月で見れるのは今年を最後に、来年から7年間は厳密には満月ではなくなります。

さて月は この地球上の生命誕生に大きな役割を担ってきたのです。我々が日々戦っている生命、この月のおかげで今 地球上に我々は生きていられるのです。46億年前、大爆発により宇宙が誕生して我々の地球も誕生したのです。何度も彗星の衝突をうけながら、中でもテイアとの衝突(グレートインパクト)で地軸が23度に傾いた事と、それによって誕生した月の存在が生命誕生の第一歩です。当時 月は現在の10倍地球に近くその影響はとても大きかったと考えられています。氷彗星の衝突で水、そして海が誕生した地球にとって月の引力は甚大で29日周期で激しい潮流を生み、その潮流が陸地にある莫大なミネラルを海に運び、豊富なミネラルを含んだ原子スープがアミノ酸を作り蛋白質を合成して生命が誕生したと考えられています。このころ地球は1日が5時間で自転していたため潮流は激しく、その環境は苛酷なものでした。潮流の摩擦が地球の自転速度を減じ、そのことにより月は1年に3.8cmずつ地球から遠ざかることによって引力は減じていって現在の位置にあるのです。その間、多くの隕石からの衝突に 月は地球の盾となったのです。30億年前、現在存在する全ての植物の祖先であるシアノバクテリアが光合成を獲得して酸素を放出し、水や大気に大量の酸素が放出され地球を大きく変えたのです。テイアとの衝突で生じた地軸23度の傾きを その後一定に保てたのも月の引力のおかげで、この地軸の傾きと安定のおかげで季節が生まれ一年間の変化の安定が多種多様の生物の順応を引き起こしたと考えられています。この偶然のバランスのもとに生まれた生命に感嘆するしかありません。膨大な時間と広大な空間という座標軸の上で、我々の人生の僅か70有余年は一筋の光の点滅であるかもしれません。しかしその一瞬のきらめきが何色に光るかは我々の生き様で決まってくるのかもしれません。

そんな思いを夜空に馳せていると月はますます中天に昇って、ちっとも恩着せがましくなく涼やかに地球を見守っているのです。

(編集委員：後藤 正幸)

あ  
と  
が  
き

先日の日経新聞に、「認知症男性、線路に入り死亡 電車遅れで遺族に損害賠償命令」という記事が掲載されていた。

認知症の男性（当時91歳）が線路内に立ち入り電車と接触した死亡事故で、家族らの安全対策が不十分だったとして、JR東海が遺族らに列車が遅れたことに関する損害賠償を求めた訴訟の判決で、名古屋地裁（上田哲裁判長）は8月9日、男性の妻と長男に請求全額にあたる約720万円を支払うよう命じた。

判決によると、男性は2007年12月、愛知県大府市のJR共和駅の線路に入り、東海道本線の列車と衝突して死亡。男性は同年の2月に「常に介護が必要」とされる「認知症高齢者の日常生活自立度Ⅳ」と診断されていた。

上田裁判長は、同居していた妻が目を離した隙に男性が外出し、事故が発生したとして「妻には見守りを怠った過失がある」と認定。別居している長男についても「事実上の監督者」とし、「徘徊を防止する適切な措置を講じていなかった」とした。

男性の家族らは、妻は事故当時85歳で、常時監視することが不可能だったなどと主張。しかし上田裁判長は、介護ヘルパーを依頼するなどの措置をとらななかったと指摘。「男性の介護体制は、介護者が常に目を離さないことが前提となっており、過失の責任は免れない」とした。

この記事を見て、ここまでやるか、弁護士はきちんと仕事をしたのか、と感じた。

65歳以上の高齢者のうち、認知症の人は推計15%で、2012年時点で高齢者数3,079万人中約462万人に上ることが、厚生労働省研究班（代表者・朝田隆筑波大教授）の調査で分かった。うち在宅有病者数は約270万人、その中で独居者は約43万人と分析している。

さらに有病率は、年代別にみると、74歳までは10%以下だが、85歳以上で40%超と推定されている。すなわち平均年齢以上長生きすれば、二人に一人が認知症になると考えられる。老々介護で24時間目を離すなどと言われても、それは酷というしかない。たとえ介護サービスを受けていても24時間の監視役をつけることはできない。

これらの認知症の高齢者を病院や施設ではなく、在宅でというのが国の政策であり、今後ますます家族の負担は増大すると同時に悲劇が増えるのが危惧される。

裁判官の両親が同じように認知症になった場合、果たして、24時間監視をつけて線路や道路に飛び込んだりしないようにできるのだろうか。また、入院や入所の場合は、病院や施設が家族とJR両者から賠償を求められるのであろうか。

（編集副委員長：田代 幹雄）

## あ と が き

一時はかなり減っていた店頭販売の豆腐屋が少し復活の兆しである。それぞれの店主にはこだわりがあるようで、スーパーのパック入りとは一線を画する豆腐を作っているようだ。正直言って雑食性の私にはその違いはよくわからないのだが、その程度の舌の持ち主の私でも、鼻負にしている豆腐屋の作る生湯葉は大好物だ。その独特の歯ごたえ、大豆の甘みと風味は絶品である。湯葉の甘みが引き立つので味噌汁に入れるのが私流である。

その豆腐業界にも色々あるようで、今年6月に三つの業界団体が70余年の歴史を越え、一つの全国豆腐連合会として「小異を捨て大同に立ち一致団結した」そうである。似たような話は最近某医学会にもあったが、どの業界でもお互いの利害が入り乱れるので「小異を捨て大同に立って一致団結」というのはなかなか容易ではない。

豆腐の原料である大豆の国内消費量は年間50万トンで、国産はわずか7万5千トンである。おまけに多くの消費者は国産指向が強いので、結果として国産の値段は高くなり豆腐業界を苦しめてしまう。一方では外国産でも非遺伝子組み換え食品を謳う大豆が輸入されており、一部には豆腐の価格破壊も起こって、それが前述の「一致団結」の起源になっているようだ。

遺伝子組み換え食品の安全性云々に関しては十分な科学的検証が必要だが、日本人の多くはパッケージに書かれた「国産」「遺伝子組み換え大豆でない」の表示を好む。米国はTPP交渉の際に、これが非関税障壁だと非表示を要求したが、各国の反対で要求を取り下げた経緯がある。

薬剤や医療機器の特許権で優位に立つ米国はTPP交渉で非関税障壁の撤廃や知的財産権に対する要求を強めることが予想される。政府は国民皆保険を堅持すると約束しているが、非関税障壁や知的財産権についてはあまり言及していない。実はこの部分が交渉の本丸だと指摘する声もあるのだが、今後の交渉は大丈夫なのだろうか。

やっぱり生湯葉が一番なんて呑気なことを言っている場合ではないようだ。

(編集委員長：吉賀 攝)



## あ と が き

今年6月12日までのほぼ半年で全国の風疹患者数が1万102人となった。昨年1年間で2,392人であったので患者急増である。大分県内の患者数は24人で昨年の4倍である。患者は4分の3が男性で20代から40代が中心になっている。大分では平成16年に風疹の流行があった。やはり成人男子が流行の中心となり、残念ながら先天性風疹症候群の発生も認められた。当時の厚生労働省の風疹対策会議で成人男子の風疹ワクチン接種の必要性が提言されたが実現しなかった。今回の風疹流行に対する厚生労働省の対応も後手後手に回り、成人に風疹ワクチン有料接種の勧奨を行い、風疹ワクチンが市場から無くなると、麻疹風疹ワクチン有料接種勧奨となり、麻疹風疹ワクチンが本家の1期、2期接種に影響が及ぶほど数が足りなくなってくると、必要のない方以外はワクチンを接種しないで下さいとなった。これでは私たちが中学生であった時代に中学2年生の女子生徒に集団接種していたのと根本的に何ら変わらず風疹根絶にはならないのである。よく考えてみると麻疹風疹ワクチンは今年3月までは1期、2期以外に中学1年生対象の3期、高校3年生対象の4期を公費無料接種でまかなっていたではないか。現在の1期、2期2回接種は平成12年4月生まれ以降の子供たちに対応し、3期、4期接種は5年計画で平成2年4月生まれから平成12年3月生まれまでの子供たちをカバーした。ということは平成26年度から5年計画で昭和60年4月生まれから平成2年3月生まれの方たちを5期として28歳になる年度、昭和55年4月生まれから60年3月生まれの方たちを6期として33歳になる年度、昭和50年4月生まれから55年3月生まれの方たちを7期として38歳になる年度、昭和45年4月生まれから50年3月生まれの方たちを8期として43歳になる年度に公費接種をすれば妊娠出産年齢をほとんどカバーできるではないか。対象年齢を限定した公費接種にすればワクチンメーカーも増産計画をたてやすいし、産業医の先生が担当する会社で集団接種をするという選択肢もできるのではないだろうか。安倍首相の提言する成長戦略にとって就労妊娠出産年齢世代の健全な就労環境の構築は、女性の就労支援、待機児童の解消とともに必要不可欠な課題ではないだろうか。あわせて子育て環境整備のために子供たちへのおたふくかぜ、水痘、ロタ、B型肝炎のワクチン公費無料接種実現の英断も期待するところである。

(編集委員：澤口 博人)

## あ と が き

今、地域医療が危ないのです。特に地方の有床診療所は火を噴いています。看護師の不足、高齢化し介護力のいる入院患者、医師の偏在。年々変化する制度の義務化と書類の山に皆疲弊していると言っても過言ではありません。介護保険制度は財政基盤を失いつつありサービス事業者に市場原理を取り入れることを余儀なくされ、そのため医療の継続性は踏みにじられ混乱を生じています。数年以内に要支援者の区分ははずされ介護予防の名のもとに自己負担の増大かサービスのカットを止むなしとされるでしょう。他方、地域ではかかりつけ医に認知症、うつ病、産業医、地域保健委員会、学校医、予防接種、乳幼児健診、特定健診、感染症対策、災害対策、休日・夜間当番医を要請し在宅診療とその特別病床まで用意せよと迫っています。一方で社保、国保は足並の揃わない基準で査定ノルマを設定しようとするし、真に踏んだり蹴つたりの状態ではありませんか。社会全体が急激に変化して高齢人口が増加し大変であることはよく理解できますが、現場に対する理解の少ない者たちが頭内の回路をめぐらしてアンケート調査を行ったぐらいで正解は導き出せないのです。現場で長い間、何が問題で、どのアイデアを駆使すればよりよい制度が作れるか、もっとも必要なものは今この読者である皆様の知恵なのです。医師会の役員に任せておけば良いなんて時代ではないのです。発信者は皆様一人一人でなければならぬのです。都市部の先生方も、他人事とは考えないで下さい。郡部の有床診療所や病院がベッドを放棄すれば自分達が日々の診療で心血注いでselectした紹介患者さんを中核病院に送ろうとしてもベッドは満床ですと断られたり、中核病院はselectされない患者で病床は満たされ、真に専門医療がなされなければならぬ患者収容能力は低下した上に主治療が終わって早期に地方に帰そうとしても受け入れ先がなく、地域連携室が四苦八苦という状況が今でも起きているのではないですか。もちろん大分県医師会でも手をこまねいてばかりいません。これまでの各事業に行政との調整を行い交渉を成立させて来ました。①認知症サポート医フォローアップ研修 ②かかりつけ医認知症専門研修の開催、オレンジドクターの創設 ③主治医意見書記載に関する研修会 ④かかりつけ医精神科医連絡推進会議 ⑤ペリネイタルビジット事業 ⑥労災保険指定医療機関研修会 ⑦健保国保社保調整会議 ⑧5疾病5事業及び在宅医療の協議会 ⑨産業医研修会 ⑩地域保健協議会各種事業 ⑪がん精密検診協力医療機関研修会 ⑫災害救急会議 ⑬男女共同参画委員会等、今年新たに保険審査検討委員会を毎月開催を決定し、また県内医師不足問題解決を測るため行政・大学との話し合いを始める予定です。未だに手がついていない問題 ①認知症周辺症状を含む精神科救急の問題(特に内科、外科疾患合併例) ②看護師不足問題 ③病診連携パスポートの作成。さて困ったときほど人間は成長します。ピンチはアイデアの母です。どうすればこの大分県の医療がこの時代の要請に答えてよりよいものになるか知恵を出して皆で考えましょう。悪いことばかりではなく、電子カルテやインターネット通信での現地会議がもうすぐ可能になります。移動の時間をかけずに考えを伝えあう時代がそこまで来ています。『大分県の明日の医療を考える会』を会長の諮問委員会として立ち上げるとしたら皆様挙ってアイデアをもって参加して頂けないでしょうか。

(編集委員：後藤 正幸)

## あ と が き

「鉄の女」と称されたイギリスのマーガレット・サッチャー元首相が4月8日この世を去った。首相時代の功績により国葬級の葬儀が行われた。

イギリス初の女性首相として、戦後最長となる11年以上、政権の座にあった彼女をめぐっては、どん底だった経済を立て直したとの評価がある一方、医療制度を機能不全に陥らせたり、金持ち優遇政策を採ったり、人頭税を導入しようとしたり、叙勲制度を復活させたりと、評価が分かれるような政策もいろいろ行い、低所得者や失業者の間には、急進的すぎる構造改革で「弱者を切り捨てた」とする批判も根強く残っている。

また、1982年のアルゼンチンとのフォークランド紛争では、英兵士の人命が失われるリスクを顧みず、英国軍のフォークランド諸島への上陸の決断と勇敢さ、「われわれは決して後戻りしない」と力強く宣言する男勝りの剛健な仕事ぶりの一方で、どんな時でもパールのネックレスをつけ、ブルースーツに身を包み、パンプスをはき、そしてお決まりのエレガントなヘアスタイルで颯爽と国会議事堂へ現れる姿は神々しく見え、女性であることを忘れない、女性であることの強みを最大限に生かして仕事をする、けっして媚びるのではなく、凛とした女性の強さと柔らかさが溢れていたとも評価されている。つまり、ある時は男勝りの女、ある時は女以上の女を演じていたが、何がそうさせたのであろうか。

男勝りの政治手腕は、男性ホルモンのなせる業だった可能性を指摘する学者がいる。500人以上のMBA(経営学修士)コースの男女学生を対象に、唾液中のテストステロン濃度とリスク回避の関連性を調査した。その結果、女子学生の3分の1は、平均的な男性と同レベルのテストステロンを合成していることがわかった。

また、興味深いことに、テストステロンの濃度が高い女子学生ほど金銭的リスクを回避しない傾向が認められた。さらに、そのような女子学生はMBA取得後に、よりリスクの高い職業を選ぶ傾向があることもわかった。仕事で男勝りの女性には、自ら体内で合成したテストステロンが影響している可能性がある」と推測している。このテストステロンは、外形的には胎児の外陰部を男性化する働きがあるが、最近ではテストステロンが胎児の脳に影響し、成人後、リスクを取ったり攻撃的な行動を取ったりする、いわゆる男性的な行動と関連することもわかってきている。胎児期に受けたテストステロンの量によって男性も女性も薬指が長くなることは既にわかっていたが、さらに薬指と人さし指との比を測ることで胎児期に受けたテストステロン量を推測できることも明らかになっている。

これを読まれた女性の方々、ぜひ薬指と人さし指との比を測っていただきたい。普段の自分の行動がこれで納得できるかもしれません。さらに、夫や恋人と比較してみてもいいでしょうか。

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

先日某所で「やせうま」を食べることがあった。やせうまは小麦粉で作った平たいゆで麺に砂糖ときな粉をかけたもので、昔から大分ではごく普通に食べられる家庭のおやつだ。先の某所で食したやせうまは少し固ゆでの上品な麺にきな粉と黒蜜がかかっており、それはそれなりに美味かったのだが、私は心の中で「こんなものは断じてやせうまでは無い！」とつぶやいていた。

私が子供の頃に食べていたやせうまは、ふやけた麺に、きな粉と砂糖をまぶし、砂糖が吸湿してきな粉と共にベタベタになった状態の食べ物であり、これが正統派のやせうまであると断言する。その方がきな粉が水分を含んでその本来の味を出すと思うからだ。

話は変わるが、近頃私の診療所のそばにお好み焼き屋が開店したので、在宅当番医のある日、職員の昼食もかねて出前を頼んでみた。そのお好み焼きは豚肉も野菜もたっぷり入っていてボリューム満点、職員にも好評だった。が、私は心の中で「これは子供の頃に食べたお好み焼きでは無い！」とつぶやいていた。子供の頃、近所の駄菓子屋の片隅で作られていたお好み焼きは、鉄板に薄く小麦粉を溶いたものを伸ばし、その上にモヤシとかまぼこを小さく切ったものをばらばらと散らし、きざみネギと鰹節をのせてひっくり返して折りたたんで醤油をかけたもの・・・とまあ、そういうシンプルなのが私には正統派のお好み焼きだった。

確かに私の正統派お好み焼きはずいぶんと時代遅れで、そのようなものを喜んで食べる子などいないだろう。それほど今時のお好み焼きは美味しい。一方、やせうまに関してはどうしても譲れないこだわりがある。過去から伝えられてきた伝統料理も時代と共に変わるのだろう。我々の食生活が多様化し、人々の好みもしだいに贅沢になってきた。しかし新しいものがより良いものに決まっている、変わっていく時代に取り残されてはならないと、TPP賛成派の方々が強弁する姿を見ると、やっぱり昔ながらにベタベタでのびた麺のやせうまの方が美味しいと主張したくなるのだ。

(編集委員長：吉賀 攝)